

からばす



Calebasse

企画/編集/発行 特定非営利活動法人
カラ=西アフリカ農村自立協力会

デザイン:DeeplusDesigns

第21号 (2009年4月1日発行) CONTENTS

- p1 女性に向けた国際支援 ヤンソン 柳沢 由実子
- p2 現地視察から帰って 村上 一枝
- p3 現地活動報告
 - 識字教室から学校へ～高まる学習意欲と就学率 (p.3)
 - 森林パトロール隊の活躍・野菜園の発展と課題 (p.4)
 - 保健衛生 新プロジェクトいよいよ始動 (p.5)
 - その他の活動 女性適正技術・穀物保存庫 (p.6)
- p7 マリ旅行記 神山 拓也
- p8 国内活動

女性に向けた国際支援

ヤンソン柳沢由実子 (FGM廃絶を支援する女たちの会)

「からばす」に原稿をとの依頼に、二つ返事で引き受けました。と言いますのも、一年半前に岩手県盛岡市でカラの村上一枝さんと緑のサヘルの菅川拓也さん、それにFGM廃絶を支援する女たちの会のわたしの三人で、「アフリカで活動する岩手出身のNGO運動家たち」という講演会があり、自分の所属する会以外の二つの団体の発表に深く感銘を受けていたからです。それぞれがアフリカ支援活動をしているのですが、ふだんは自分たちの活動で精いっぱい、他団体が取り組んでいる問題を深くは知りませんでした。村上さんのマリの村々での具体的な活動報告に勇気を与えられました。とくに女性支援のプロジェクトに関心をもちました。わたしたちの団体もまた女性支援の団体です。

アフリカには53の国があり、人口もアジアに続いて多く、出生率死亡率は世界一高い地域です。ほとんどの国がヨーロッパ諸国の植民地だったため、長年にわたる搾取によって土地も人々も疲弊しています。ようやく独立を勝ち取った後も、紛争、自然破壊、食糧難、疫病、貧困とつきつぎに災難にみまわれ、発展がはばまれていきます。いままでもアフリカと関係のあった国なかった国を問わず、世界中の国と人々が、この困窮している地球の一地域を援助し発展に協力しなければならない段階に至っています。

総体的にアフリカを見ればそういうことなのですが、1996年に「FGM廃絶を支援する女たちの会」を立ち上げたとき、わたしはそんなことがわかっていただけではないのです。特別にアフリカに関心があったわけでもありませんでした。『喜びの秘密』（集英社刊）という女性性器切除 (FGM) をテーマにした小説を訳したことがきっかけでした。女子割礼という名前で主にアフリカで行われてきたこの慣習を扱った作品です。

わたしは1995年にこの本を刊行した後、同年の9月に北京で開かれた国連主催の世界女性会議で、FGM廃絶運動をしているアフリカの女性たちに出会いました。そしてこの伝統は慣習化された女性に対する暴力であると訴える彼女たちの話を理解しました。この会議の報告書で国連は「FGMは女性に対する暴力、人権侵害、健康破壊、女兒の虐待である」と位置づけています。

結婚のための通過儀礼とされ、女子割礼と呼ばれてきた何千年もの慣習の実態が性器の切り取り (FGM) であるということが判明したのは、いまから30年ほど前のことです。FGMにはWHOによる分類によれば三つのタイプがあり、クリトリスの一部あるいはぜんぶを切り取るものから、すべての外性器を切除した上縫合するという過酷なものまで現在でもおこなわれているのです。この行為を女性性器切除と呼ぼう、女子割礼と呼んでいるかぎりその残酷な実態は伝わらないから、と用語を変えたアフリカの運動家たちの意図に共感して、わたしたちも女子割礼という言葉は使わず、女性性器切除 (FGM) と呼んでいます。

この話をすると、たいていの人は「でもそれはいまでは終焉を迎えている古い慣習でしょう?」と訊きますが、残念なことに廃止運動がある現在でも1億3000万人もの女性がFGMを受けているのです。女性の社会的地位の低さ、識字率の低さ、男女の力関係、性と生殖に関する迷信などが廃絶を妨げている要因と考えられます。FGM廃止の呼びかけは、社会の成り立ちそのものの変化を迫るものなので、廃絶には時間がかかります。でもその間にも1日8000人、年間300万人を超える少女たちにFGMがおこなわれてしまう。わたしたちは日本で一つだけのFGM廃絶支援団体ですが、この慣習を立ち上がったアフリカの人たちと力を合わせてストップさせたいと願い、支援活動をしています。からばすの読者の皆さんもどうぞご理解くださいますようお願いいたします。



FGM廃絶を支援する女たちの会

〒162-0062 新宿区市谷加賀町 2-5-26
TEL 03-3235-8266/FAX 03-3235-8267
E-mail : waaf@jca/apc.org
URL : <http://www.jca.acp.org/~waaf>

現地視察から帰って

村上 一枝

2009年2月28日、現地の出張からもどりました。今回の出張について感じたことを少し申し上げます。

2008年の秋には主食のトウジンヒエや、女性にとってとても貴重なカリテの実の作柄に恵まれました。村を歩いている時、あちこちの家庭からカリテの実の殻を乾燥するカマドから煙が立ちのぼっているのを目にしました。このカリテの実の収穫は懐具合を左右しますから、家庭の経済状況も変わってきます。私も久しぶりにカリテの油を買い、ママブグー村の女性グループにセッケン120コを製造してもらって、今年のイベント用に持ち帰りました。しかしトウジンヒエが豊作だった割にはkgあたりの価格が高くなっています。通常収穫後数ヶ月は65cfa(11～15円)ですが、2月にはすでに80cfaでした。これはトウジンヒエの作付けに替えて、先進国が購入するゴマを優先して作付けた村が多くあった為なそうです。ゴマからの収入があってもトウジンヒエを買う時に価格が高くなっていたら生活苦が深まるばかりです。現金収入の少ない村の人には、金が入る方向へ顔を向けるのは当然のことです、金が入ればいいじゃないか、金で欲しい物が買えるからいいじゃないか、という両者の意識では、いつまでたっても自立の道は開けないのでは、と思います。村へ入る道筋にはジャトロファの畑も広がっていました。これも同じことが言えると思いました。

20年近く支援事業を継続して、確かに村の人たちの意識や生活は多くの面で変わって来ましたが、でも変わらない、というより気がつかないでいるのは私たち側で、アフリカ支援と言いながら、アフリカの人々の生活や意識を知らないままに支援し、そのことに満足し、結果現地の人たちを利益の追究に加担させ、利用しているのではないかと疑問に思い、更に、我々の生活に必要なだからアフリカの人にも必要だ、とか、この方が合理的だからアフリカでもそうあるべきだ、と我々の生活の中から生み出したものを、押し付け(悪い言い方ですが)ているのではないだろうか、そして、意識が変わらないからと言って、彼らは出来ない人たち、とか、本当にダメだ、とかと思ってはいないか? 等と、変り行く村の状況を目にして多くの疑問が湧いて来ました。我々はどこまで、いつまで支援をするのか、その程度や終わりは果たしていつくるのか、とも考えさせられました。しかし常に忘れてはいけないことは、仮面で頼かむりした活動にならないよう、常に現地の人々になって、活動を続けることがカラのなすべき道と改めて感じて帰国しました。



カマドでカリテの実を乾燥させます

現地活動報告

2008年11月～2009年3月



識字教室から学校へ ～高まる学習意欲と就学率～

毎年雨季の間は識字教室は休講し10月から再開されていますが、2008年は降雨量が多くトウジンヒエが豊作で、その収穫作業に追われ識字学習の再開が遅れていました。しかし村によっては学習熱が高く、10月になって識字学習を再開した村もありました。特に女性の学習熱が高く、農作業や家事の傍ら熱心に勉強する姿には心を打たれるものがあります。村の人たちにとっては農作業や結婚式も多く、実際は一年を通して学習が可能な期間は非常に少なく数ヶ月だけです。この短い期間に文字や数字、計算を学び生活に役立てているのです。今、女性間で女性委員会主催の貸付事業が積極的になり、その継続の為に計算も文字も必要であることが認識されてきたためと思います。

2008年度は、トウグニ地域では新規に5ヶ村へ識字教室が開催されることになり、教室が建設されました。この新教室で指導する村出身の新しい先生の為の研修会も2月に7日間開催され、終了後3月からそれぞれの村では新教師の下で授業が始まっています。

カラは、クーラ地域で1994年以降、トウグニ地域では2000年以降識字教室を建設し、教師を育成して村の人たちへ識字学習を続けて来ましたが、学習へ参加したのは約80ヶ村で、その人数は数えきれない程になると思います。今までの行程は決して容易なことではありませんでした。しかし今、学習に情熱を持ち熱心に教室に通って来る人は当初の倍の人数になったようです。識字教室の普及に関連して、就学児童が増えて小学校の建設や教室の増設が多くなりました。過去に建設した小学校では、新たに中学校の建設にまで発展しました。2008年に建設したマフェレニ中学校もその例です。新たにモバ村中学校の建設の要請もあります。小学校の建設についてはコミンに経済力があり建設可能な時には、3教室だけの建設をしていますが、教員室やトイレ建設、机の整備までには及んでいません。今回、皆さまに別紙でご支援をお願いしましたカニカ小学校もその例です。そして今までのCED(村開発の為の小学校、という名目の土レンガ建設の校立小学校)の多くが公立小学校にマリ政府から格上げされました。ですからCEDがあった村では生徒への教育に対する質が上がり、学校の格上げと併せて住民に教育についてのモディベーションを高めていると思います。就学児童が増えて行くことは非常に喜ばしいことで、今後も村の人たちの教育熱は高まることと思います。



↑ 新人識字教師への研修会が開催されました



↑ 完成したマフェレニ中学校

森林パトロール隊の活躍・野菜園の発展と課題

学校林、村の造成地ともに順調に育っており、昨年からは始まった森林パトロール隊の活動は引き続き継続されています。森林パトロール隊は、予告なしに森林地帯を巡回して、他地域から来た森林伐採者を発見し、摘発してオゼフォレ(治水森林局)に届けます。この伐採者は罰金を支払います。このパトロール隊は一週間に数回巡回して活動しています。この事業が始まって多くのメリットが出て来ました。

伐採者の摘発もそうですが、森林火災が非常に減少したことです。今期は火災が一回発生しましたが、早めに食い止めることが出来て広範囲には及びませんでした。また女性たちは、炊事に必要な薪を枯れた木を拾ってきて使用するようになり、生木を伐採しなくなりました。

もしも地域において新規に伐採地を開拓をするような場合には、治水森林局へ許可を得るようになります。だんだんと自然保護の重要さを認識してきているようです。

野菜園の活動は常に活発です、特にタバスキ(イスラム教の祭り)に向けて販売された野菜からの収入は女性たちにとって予想外に多く、これは新たな問題を発生しています。それは、過去のようには女性には殆ど収入が無かった時には、女性間の付き合いも互いに思いやる気持ちが充分にあり、穏やかな状況でしたが、収入を得ることによって利己的な面が現れ、協同作業よりも個人の利益が優先し協調性に欠けてきたようです。野菜の種子をみんなの会費で今まで通りに購入し、育苗をすることにも合意できなくなってきた村もあります。女性委員会の会議でも意識の違いが生じて協同での活動がうまく進まない村もあります。これは、支援事業における功罪の両面が表れて来たことです。

また新たに造成したフォカラ村野菜園は活動中心のコナ村から遠く30km離れているので、新たな試みとして村から数人を呼び、彼らが技術を学んで村へ帰り『技術指導者として』他の人へ指導する、という方法をとってみました。野菜園造成後2009年1月にスタッフのスマイラと村上が村を訪れた時には、区画割りが不平等で深井戸に近い便利な所を村の有力者の家族の女性が占め、足の悪い老婦人には井戸から遠い区画が与えられていました。区画の整備もスタッフが指導したようではなく、これらは納得のいく状況ではありませんでした。次期耕作期には再度カラのスタッフが直接指導します。コンド野菜園はバマコ市とニアミナ町間の定期バスの運行する街道の横に造成されたので、バスの窓から非常によく見えて素晴らしい宣伝になります。開設時には0.5haの野菜園内で、栽培を希望する女性が100人以上もいて多すぎたため、これを70人に絞る為に抽選を行い、外れた女性は野菜園を囲む金網の1面を利用し、他の3面を枯れ木で囲い、自らの畑を造り野菜栽培をしています。この野菜園はニジュール河に近いので地下水位が高く非常に恵まれています。将来はいい野菜園になると期待しています。



↑フォカラ村野菜園の光景

保健衛生 新プロジェクトいよいよ始動

昨年10月からJICAパートナー事業として「サヘル地域女性による衛生環境改善事業」がスタートしました。これは3年間の継続事業です。目的は、事業対象地域であるトゥグニコムンで各村から選ばれた5人の女性が自村の衛生環境を改善する、ということです。この女性のグループ名を「ケネヤムソーの会」(バンバラ語で、健康をつかさどる女性の会)と名付けました。

この事業の現地リーダーにはアワ・ケイタを当て、彼女は保健コーディネーターになる為に4ヶ月バマコで研修しました。また日本人業務調整員として過去にカラのスタッフであった内



↑写真左からアワ・コナレ、コニンバ・シディベ、指導者、研修中のアワ・ケイタ、

野香美を再雇用し現地に派遣しました。この事業にはカラが現在まで継続している保健衛生・病氣予防等のすべての事業を含んでいます。住民への健康に関する意識の普及やトイレの建設、助産院、診療所の建設も含まれます。今は村の女性2人を助産師として育成しています。

本格的な事業の開始に当たっては、1月に研修を終え保健コーディネーターとなったアワが、内野と共にトゥグニコムンから10ヶ村を選び、衛生や病氣に関する意識調査を行いました。これは後の事業進展についての準備です。

この調査の対象となった村の選択基準は①人口が多い村、②人口の少ない村、③信仰心の篤い村、④信仰心の薄い村、⑤生活水準の低い村、です。

調査の結果はマラリアやエイズの病氣についての知識、清潔にしなければ病氣に罹りやすいという知識はあるものの、その方法を知らないということが顕著に述べられていました。この調査では10年以上もカラがエイズ予防やマラリア予防寄生虫駆除の活動を毎年行い、その都度毎に村人へ学習会を行っていた結果としてそれらの意識が植えられたのだと思います。病氣の予防や出産についての啓蒙活動で話を聞いても、昔からの慣習を長い間頑なに信じていた人、特に男性は今までカラから聞いた事を半信半疑のまま少しずつ試した結果「ヤハリ」と納得できたと言われました。

現実にトイレに行きたくても、公衆トイレが少ないことも訴えられました。当事業に於いて、初年度(2008年10月～2009年3月)には8ヶ所のトイレの建設、故障中の深井戸の工事を2ヶ村で実施して使用可能にしました。また、寄生虫駆除薬の配布も行いました。これらもすべてJICA事業に含まれます。今後はケネヤムソーの会の女性グループへ公衆衛生についての指導を行い、彼女たちが村で順調に活動できるように支援することが課題です。積極的に活動をするアワの力に期待しています。

その他の活動 女性適正技術・穀物保存庫

先述の活動に加えて、女性適正技術指導については、アワが保健コーディネーターとしての研修期間中はこの活動に携わることが出来ませんでした。

しかし、アワの不在時に各村の女性たちだけで活動を進めていけるか、また貸付事業返済月もあり、会計処理もどのように出来るかをみる絶好のチャンスでした。貸付事業の返済についての事務的な清算は、コナ村とベレニコ村だけが女性委員会独自で清算していました。他の村ではアワの帰りを待っていた村、他のスタッフの手助けを借りて精算した村といろいろでした。この状況をみると、まだ独自の運営は無理なようです。新規に女性センター3ヶ所を開設しました。

次に、コナ村の穀物保存庫の状況については、平成19年度に確保した1.6トン(購入額160,000cfa=約32,000円)のトゥジンヒエは平成20年6,7,8月にはコナ村や近郊の村へ市場よりも低価格で販売され、食料の不足した時期に有効でした。これによる純益の40,000cfaと元金を加算すると、200,000cfaになり、これを再利用し、更に村の人たちの供出で合計4トンのトゥジンヒエを2009年1月に確保しました。

これは2009年の食糧不足時の販売用に備えています。この保存庫は規模の小さいものですが、村の人たちにとって非常に役立っています。

コナ村診療所ではカラで育成した助産師のマイムナが、村の女性たちとの関係が悪くなり、その原因を聞いても答えないうちに退職しました。今は、コナ村の村長の家族から若い女性を選ばれクリコロで研修を受けています。研修費は村の負担です。

終了後はコナ村に戻り働くことになっています。多分人々の妬みが強く、勤務を続けていくのが耐えられなくなった為と想像しています。モバ診療所に関しては問題なく診療が進んでいます。診療所で働く看護師と助産師もJICAのプロジェクトへ全面的に協力しています。

マリ旅行記

神山 拓也 (名古屋大学四年生)

今まで見た事の無い風景。雨が少ないから土地は豊かではないけど、それを感じさせないみんなの絶えることのない笑顔。人との交流。文化の違い。満点の星空の下、何もすることは無いけれどゆったりと流れる時間。マリへの旅行で、日本では味わえないたくさんのことを経験した。

マリに着いて次の日、朝起きたらすぐに車に乗せられ、初めて出会う日本人の内野さんとマリ人のセイドゥと共に村に向かった。マリでの初日は夜に着いたので、朝起きて車からマリを見ると、舗装されていない道路、日本では余り見かけない肌の黒い人々、当たり前だけどみんな黒かった。バオバブの木をはじめとする見慣れない植物たち、見る物すべてが珍しく新鮮だった。特に、幹の直径が10m以上もあり、何百年、何千年も生きてる植物バオバブの木がこんなに乾燥した土地に立派に育っているのは、神秘的であり植物の力強さを感じた。

一人で村をブラブラ散歩していると、どこの村に行ってもまず笑顔の素敵な子供たちが近づいてきて村の中を案内してくれ、土でできた家に入れてくれたり、トイレに行きたいといったら土の壁で覆われポツン

と小さな穴だけがあるトイレに案内してくれてとても新鮮だった。最初は警戒していた色とりどりの服装に身を包んだ女性たち、こわい顔をした男性たちもアニチェ(こんにちは!!)と笑顔であいさつすると、にこやかにあいさつを返してくれ、ご飯の炊き方や、作物の茎から作る籠、綿から織る布の工程を見せてくれた。時にはご飯をご馳走してくれた。みんなでトゥジンヒエなどから作ったプリンのような主食を手でオクラのぬるぬるしたソースをつけて食べたり、鶏の入ったソースをぶっかけたご飯を突っつきあうのは、それだけでみんなと近づけた感じがして楽しくとてもおいしかった。

一回だけ村の人々だけが来る食事会に招待された時には、みんなイスラム教徒なので独特のお祈りをしてからご飯を食べており、異国の雰囲気を感じたと共に文化の違いを感じた。畑へ行くと野菜への水やり、除草など村の人たちの野菜の栽培法を見せてくれた。水道はないので、井戸から水を汲み、バケツで水やりをしていた。化学肥料はないので、動物の糞を肥料とし、除草剤や機械もないので手作業で除草をしているのを見たとき、大変だなと思うと共に、日本人が食べ物をポイポイ捨てることを恥ずかしく思った。

村から帰る時には畑で採れたパイヤやトマトを毎回お土産に持たせてくれ、時にはニワトリもくれた。ベレニコ村ではコケダンベレとマリの人々の名前をつけてもらい、みんなにコケ、コケと言われ笑いあい、言葉は通じないけれど、なぜか心が温まりとても楽しかった。日が暮れると電気がないのであたりは真っ暗になり何もできないけど、満点の星空の下で机の上の一つの皿をみんなで囲い、それを突っついて食事をし、バカ話をしながら笑い合うのがすごく楽しかった。ご飯の後はポッキーと空を見上げ、星を見ているだけで心がふわっと和み、とても心地良かった。

今回の旅では、滞在期間も短くマリの良い部分ばかりを見てきた気がする。しかし、村の人々はAIDSやマラリアなどの病気、降雨量が少ないことから生じる食糧や栄養不足、女性差別、文字の読み書きができないことから生じる収入の差などに悩んでいたのだろう…。今度行く時には村の人たちが困っていることを聞いて自分のできることをしてみたい。また、今回出会ったマリの人々のみんなの笑顔をお忘れず自分に何ができるのかを常に自分に問いかけ、いろんなことにチャレンジし実行していきたい。

カラから一言

神山拓也君は大学卒業式直前に、是非カラの現場を訪れたいということでマリに来ました。内心カラの現地サイド(私、村上も含めて)では、往々にして、今まで村を訪問した20代の青年は、女子に比べて精神的な面も体力でも問題があり、「又来たい?」と聞くと「イヤ、もう来ません」と言う答えが返って来ていたので、今回も覚悟して迎えました(それに大事な会員さんのお子さんでもありませんから...)。しかし彼は違いました。フランス語も全く話せないままに、カラのスタッフや村の人たちと予想以上に親しくなり、彼の文章にありますように先々で土産を買って帰ってくるので、村へ同行した内野は、「食べる物が無くなったらコケにどっかの村へ行ってもらおう」と大喜びでした。短期間の滞在でしたが非常に多くの体験を積み、「将来2度マリへ行く」(どんな意味の2度か分かりませんが)と言う意気込みです。



↑カラスタッフと神山拓也君(前列中央)

国内活動

- 11/9 【第28回むさしの青空市】で活動紹介 武蔵野市・むさしの市民公園
- 11/11 岩手県立大学盛岡短期大学部にて講演 盛岡市・岩手県立大学盛岡短期大学部
- 11/12 宮城・名取北高校での講演「創立30周年記念講演」 宮城県名取市・名取北高等学校
- 11/14 【CARE-WAVE AID Vol.3『選ばれた大地アフリカ』】にて活動紹介 新宿文化センター
- 11/29 【カラ・チャリティーコンサート スペシャル かけはし】 恵比寿・Ted Art Studio
- 12/7 パネル討論会【アフリカ その豊かさ と 貧しさ】 武蔵野市・御殿山コミュニティセンター
- 3/5～11 【地球市民講座2009 アフリカを考える～紛争・貧困・教育・平和～】にて展示 千代田区役所
- 3/15 H20年度 特定非営利活動法人 補助金助成事業報告会にて事業報告 武蔵野市役所

2009年4月以降の予定

- 4/29 東京女子大学【園遊会バザー】での活動紹介 東京女子大学
- 4/29 【第6回かながわく国際交流まつり】 横浜市水再生センター
- 5/16,17 【アフリカン・フェスタ2009in横浜】での参加・活動紹介 横浜市・赤レンガ倉庫イベント広場
- 5/19 仙台市立七郷中学校生徒さん5名修学旅行時・都内研修として事務所訪問
- 6/28 【東京白梅会】での活動紹介 中野サンプラザ
- 10/上 【グローバルフェスタJAPAN 2009】 日比谷公園
- 11/26 【カラ・チャリティーコンサートかけはし】 銀座・十字屋

からばす(Calebasse)-第21号- 2009年4月1日発行

特定非営利活動法人 カラ=西アフリカ農村自立協力会

<http://ongcara.org/>

東京事務局

〒180-0002 東京都武蔵野市吉祥寺東町1-1-6-102

Tel:0422-29-7640 Fax:0422-29-7688

E-mail: centre@ongcara.org

バマコ事務局

BP E367 BAMAKO MALI

Tel:223-2020-9096 Fax:223-2020-3589